調査報告

日本経塚信仰の起源と源流を探る Ⅱ

―韓国調査中間報告と予備的考察―

菅　野　成　寛※

はじめに

12世紀の列島を席巻した経塚信仰の定説、日本起源説を根底から検証すべく、本センターの劉海宇氏と共に中国調査を実施したのは2014年7月のことで（浙江省文物考古研究所、浙江省博物館ほか）、その要点は次の通りであった（拙稿「日本経塚信仰の起源と源流を探る―中国調査中間報告―」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第3集、2015年）。

ⓐ、経塚（埋経）信仰の初見史料、比叡山延暦寺の学匠、覚超（かくちょう）撰の『修善講式（しゅぜんこうしき）』（989・991年）に述べられた、卒塔婆を建てた地中に仏経と仏図ほかを埋納して霊験の仏地とするとの発想は、日本由来とは見なせぬこと（つまり地中への経典埋納の前例は、わが国では皆無な点）。ⓑ、一方、同じく10世紀後期の大陸では、仏舎利塔の地下、地宮への仏舎利と経典の納入例が散見し始め、経典を地中に埋納した日本経塚の先行例にも想定され得ること（浙江省杭州市・雷峰塔〈977年納入〉、河北省定州市・静志寺塔〈977年納入〉、遼寧省朝陽市・北塔〈1044年納入〉ほか）。ⓒ、その仏舎利塔への納入品と、日本経塚の供養具（仏像・仏具・鏡・貨幣ほか）とが多く一致すること（奈良国立博物館編『聖地　寧波』2009年ほか）。ⓓ、12世紀初期から中期の北部九州地域にのみ集中する輪積式（わづみしき）経筒の銅産地が華南（中国）産で、その銘文や墨書銘に宋人名（陳・李・王ほか）が多く見出されること。さらにこの輪積式経筒には蓋の頂部に相輪が装着され、大陸の呉越国や契丹国の相輪を有する経筒と相似すること。ⓔ、年代不明ながら、半島の平壌（ピョンヤン）郊外の長寿峰（大城山城）から出土した石製の経箱と、京都・浄土寺経塚出土の石櫃（1289年銘）の形姿とが近似し、日朝共に『法華経』が納入されたこと（石櫃の先例としては、早くも1113年銘の佐賀・千々賀経塚のそれがある）、等々であった。

さらにこれを追跡すべく、2017年7月に中国江蘇省・宜興市博物館や浙江省・天台県博物館ほかを、次いで9月には韓国調査を共に劉氏と実施し、幾つかの新事実に接した。

まず宜興市博物館の館蔵品は法蔵寺転輪蔵の地宮からの出土品で、崇寧4年（1105）に埋納された仏・菩薩像34体ほかと共に、相輪を有する木塔型の経筒2基（高・14.2㎝と残高・11.3㎝）が発見されたことは特筆される。同じ出土品の紙片には「塔貯仏経」と墨書されていたことから、この2基が経筒であることは疑いない（許夕華編『法相光明―江蘇宜興法蔵寺北宋地宮文物―』2015年）。しかもそれが仏舎利塔下ではなく、転輪蔵（経蔵）下の納入品（ちなみに仏舎利は安置されず）であっ

※　中尊寺仏教文化研究所、岩手大学平泉文化研究センター

たことは予想外の新発見であり、劉氏によれば同様の転輪蔵例が数例あるとのことで、詳しくは劉報告に譲る。なお出土文物の調査ほかにあたっては、同博物館の朱軒林館長助理の特段のご高配に与ったことを特に付記しておく。

1、高麗大学校博物館と国立慶州博物館の経筒

(1) 高麗大学校博物館の経筒

韓国ソウル･高麗大学校博物館所蔵の、〈経筒〉状容器について初めて紹介されたのは『考古学ジャーナル』86号（1973年9月号）誌上においてであろう。鋳銅製円筒式で鍍金がなされ、形姿が日本の経筒に酷似するとはいうものの、法量以外、出土地ほかは不明で、台底系の蓮台底の形態から統一新羅期の複蓮弁に近似することを指摘するほかは未詳（坂詰秀一解説）、とされる。

44年後における本調査はおそらくその第2例目で、私と劉氏に石黒ひさ子氏（明治大学、中国古代史）も加わり、2017年9月5日、知己の東国大学校・崔應天教授（金工史、韓国・文化財庁文化財委員）のご尽力により、思いもよらず手ずから調査し得たことは予想外の成果であった。

『考古学ジャーナル』誌に載るモノクロのグラフ写真では筒全身が錆びた状態に見えたものが、思いのほか鍍金が多く遺存し、何よりも目を引くのは筒上部に陰刻された種子らしき記号で、今回新発見のものである。その形態は、鋳銅製の円筒形で鍍金が施され、蓋は内蓋式の傘形、台座は蓮台形で、筒身は正円形を示している。サイズは、蓮台の最下部から筒身の最上部までの総高27.5㎝（筒身24.3㎝、台座3.2㎝）で筒身の径（外側）は上部と下部とも9.2㎝、傘形の蓋は撮みも含め総高5.6㎝（撮み3㎝）、台座の最下部径は11.5㎝で、二重蓮弁文が繞る。筒身の最低部に取り付けられた底板金具とその残欠が遺存し、残欠の径が9.2㎝を計ることから間違いなく底板金具である。また筒身

写真1　筒全体部

写真2　筒身と台座

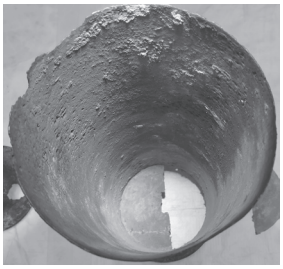


写真3　筒身の内部と底板

写真4　蓋と撮み

写真5　台座（二重蓮弁文）

写真6　記号（陰刻）部分

写真7　陰刻部分を黒くなぞったもの

の厚さは1㎜弱の薄手の造りで（写真1～5）、思いのほか重量感はなかった。同館の方によれば出土地と来歴は不明、とのことであった。

今回新たに見つかった記号（種子？）は、向かって左辺が縦4.8㎝×横2㎝、右辺は縦6㎝×横0.9㎝内に陰刻され、日本の経筒にも類例を見ないものであった（写真6、7）。

わが国の類例とはいっても、私の知る限りでは康和5年（1105）銘の銅製経筒（鳥取・伯耆一宮経塚出土）の傘蓋の表面に4文字の種子を刻印したものと、長寛1年（1163）銘の銅製経筒（東京・百草経塚出土）の筒身部に14文字の種子を刻印したもの位で（『経塚遺文』43・257号）、他に遺例があったとしても経筒への梵字刻印はごく希であろう（愛媛・奈良原山経塚の宝塔1例がある。奈良国立博物館編『経塚遺宝』1977年）。

仮に本品の記号を〈種子〉と見た場合、該当するのは𑖀（阿・ア）字の異体字𑖁が似つかわしいが、かなりの違和感がある。これを朝鮮半島の種子としても、現在知られているのは主に13世紀以降の梵鐘に陽鋳された梵字であり（歴史考古学研究会編『歴史考古学』59、62、65・66、69、74号〈2008～2017年〉にその紹介がある）、今後の研究を俟つほかない。ただし後述のように、仮に本品が10世紀代の作例であるならば、これまで未知の梵字資料が北朝鮮の開城近郊から発見されたことは、高麗初期における半島の梵字資料がきわめて乏しいなか是非とも知っておくべき新事実であろう。

開城（ケソン）は言うまでもなく高麗国（936～1392年）の首都、開京（ケギョン）の所在地だが、その中心から東北方向に約10㎞の開城市龍興洞五冠山の南麓に所在した霊通寺は、高麗天台宗の開祖と仰がれる大覚国師・義天の住持した寺として知られる。義天（ぎてん）（1055～1101年）は、高麗第十一代王・文宗の第四子として生まれ、華厳教学を学んだのち入宋して華厳と天台教学を修め、帰国後は天台教学をもって諸宗を統一した高麗仏教界の高僧で、死後は霊通寺に葬られた。霊通寺の開創は文宗2年（948）前

の10世紀初期と見られ、廃絶は16世紀末とされる。朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古研究所と大正大学とによる霊通寺跡の発掘調査が1998年と1999年に実施され、1～3次におよぶ伽藍遺構が確認されたという（大正大学綜合仏教研究所編『霊通寺跡―開城市所在―』2005年）。

問題の梵字資料は、義天の住持期を含む第2次層の西側伽藍区域・1建築址から出土した瓦当で、瓦当の中心には「心」字が、これを囲繞して種子が陽刻される（写真8）。調査報告書によれば、2次層の年代は義天が霊通寺に入寺した11世紀後期か、あるいは12世紀初期～13世紀末・14世紀初期という。一見して梵字の字形はいささか異形であり、わが国の識者にお質ねしたところ日本や中国には類例を見ない字形とのことで、いまのところ解読の術はない。むろん、高麗大学校博物館の記号（種子？）と合致する種子はないが、今後いかなる発見があるやも知れぬので、あえて参考例として紹介したところである。

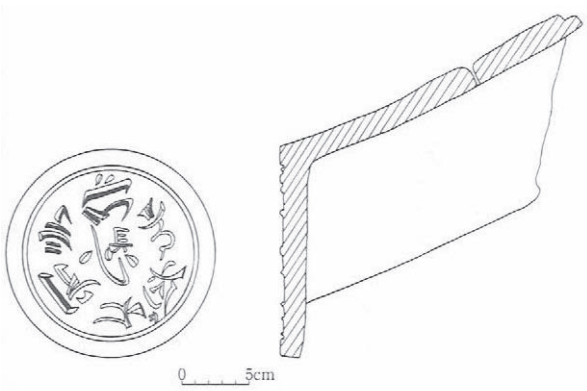


写真8　梵字入り瓦当（左）と実測図（瓦当径16.2・厚さ1.8㎝）

高麗大学校博物館所蔵品の記号についてはいまのところ不明として、台座の意匠、二重蓮弁文（写真5）はあらためて注目されてよい。崔應天氏はご専門の金属工芸史の見地から、その意匠を、統一新羅末期から高麗初期の作行とされる。900～950・60年代であろうか。専門外ながら、試みに統一新羅期の作例をソウルの国立中央博物館で購入した図録から探したところ、感恩寺東塔と西塔（慶尚北道慶州郡）の舎利器（682年頃）と、東甘山寺址（慶尚北道慶市外）の石造阿弥陀如来像（719年）が見出された（国立中央博物館編『国立中央博物館』2014年、195・196・181頁）。共に、台座部分に二重の蓮弁文が施されている（写真9、10）。また高麗期とされる作例としては、江陵正東津里の五層石塔（江原道江陵郡）と、神福寺址の三層石塔（同）の台座（写真11、12）のものがある（杉山信三『朝鮮の石塔』彰国社、1944年）。

やはりこうした台座の二重連弁文は、統一新羅期および高麗期に通有する一般的な意匠であったことになり、それが高麗大学校博物館の本品にも確かに認められたわけである。

では、筒全体の意匠はどうか。本品と同様、傘蓋（撮み付き）と台座を有する日本の類似品に、たとえば鞍馬寺経塚（京都）出土の2点の銅製経筒がある（関秀夫『経塚とその遺物』至文堂、1990年）。共に12世紀のもので、円筒形のものは鍛造製で総高31㎝（写真13）、八角形のそれは鋳銅製で総高42㎝（写真14）だが、傘蓋と台座ともにその違いは明白で、造形上、高麗大学校博物館の館蔵品とは越え難い隔たりが認められる。

写真9　感恩寺東塔の舎利器

写真10　東甘山寺址の石造阿弥陀像

舎利器台座の二重連弁文（拡大）

阿弥陀像台座の二重連弁文（拡大）

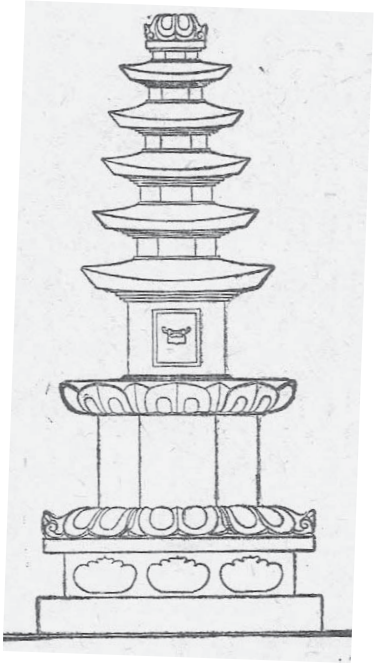


写真11　江陵の五層石塔

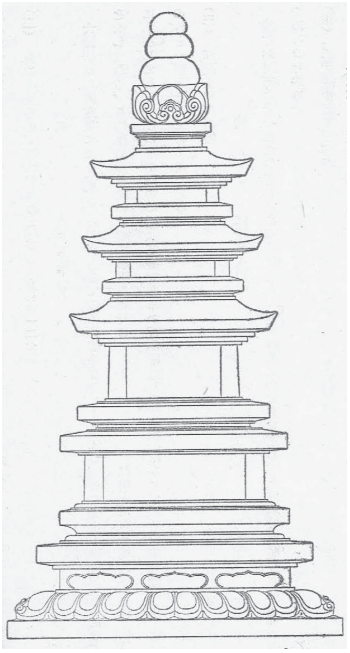
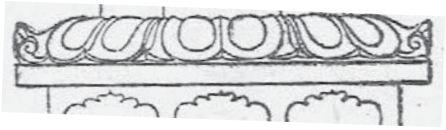
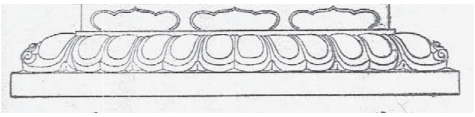


写真12　神福寺址の三層石塔



五層石塔台座の二重連弁文（拡大）



三層石塔台座の二重連弁文（拡大）

写真13　鞍馬寺経塚の経筒

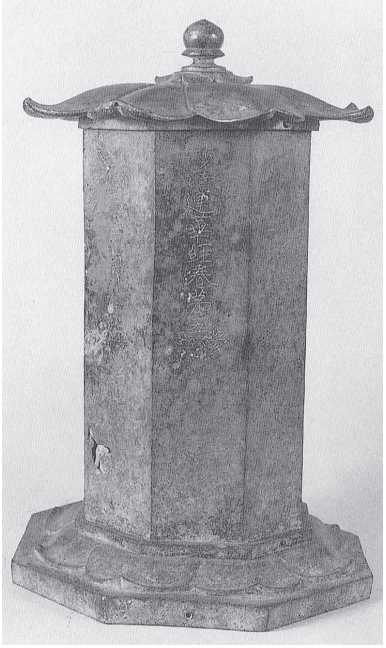


写真14　同左

ところで出土地や伝来は同館のものと同様に未詳だが、注目すべき伝承品が日本に所在する。写真の、八角形のものは総高約28㎝（写真15）で三重県旧久居市（津市）に、円筒形のものは総高が約30㎝（写真16）で島根県太田市に所在するという。共に筒身（銅製）の中央部に、ひときわ大きく人物像が、そしてその頭上には記号らしき一文字も陽刻され、一見してわが国の経筒とは認められない。

写真15　八角形の筒身

写真16　円筒の筒身

館蔵品の筒身

写真15の台座（拡大）

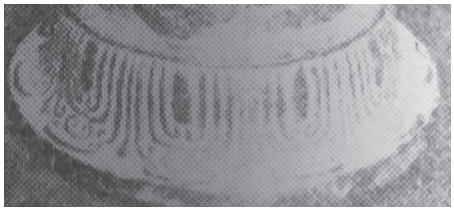


写真16の台座（拡大）

館蔵品の台座（拡大）（前掲）

館蔵品の傘蓋（写真４前掲）

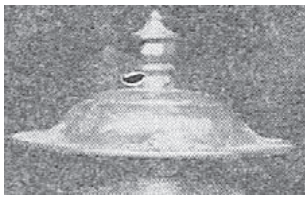


写真16の傘蓋

八角形の人物像（写真15）の足下に蓮華状の意匠が認められることは、おそらく本像が仏菩薩像であることを暗示しよう。残念ながら円筒形の人物像（写真16）の足下は不明瞭で判然としないが、本像も八角形のものと同一の形姿であることは、これまた仏菩薩像を暗示するに違いない。次に台座を見ると、八角形のそれはまさしく二重蓮弁文で、円筒形のものは台座の形体、立ち上がりが高麗大学校博物館の館蔵品に近い。しかも傘蓋の姿は、円筒形のものと館蔵品とが酷似する。

陽刻された二体の仏菩薩像の頭上には何やら解読不能な文字、あるいは記号が表され、円筒形のものは仏菩薩像の天蓋（写真16の記号）に見えなくもない。しかし頭上の半楕円状のそれは2点とも起筆が太く、止めが細めの不整形を示し、どうやら天蓋とは見なし難い。円筒形の半楕円状の上部は、たとえば種子𑖌（唵・オン）などの仰月点（ぎょうげってん）、𑖌に似ていなくもない。やはりこれは何らかの記号あるいは表徴と見られ、下部の仏菩薩像と一体的なものであるに違いあるまい。このような一種の記号を筒身の上部に表示する点では高麗大学校博物館の館蔵品と共通し、上述した台座や傘蓋の親近性など館蔵品との距離も近しい。

写真15の記号

写真16の記号

これら2点の筒形容器を紹介された三宅敏之氏は、その追記において「(写真15、16）の類品を、その後、四例聞知しているが、そのうち京都・杉本哲郎氏所蔵品は、同氏が戦前に平壌市近郊から出土したものを購入された」、ことを付記する（同氏「経塚研究の現状と課題（四)」1978年初出、同氏『経塚論攷』雄山閣出版、1983年)。この杉本氏証言からすぐさま想起されるのは、本稿の冒頭、ⓔで触れた、平壌郊外の大城山城から出土した『法華経』納入の石製経箱の存在である（写真17、18)。

納入の『法華経』は随喜功徳品第十八と如来神力品第二十一の断片で、北朝鮮の報告書は石製経箱の年代を5～6世紀とするそうだが（坂詰秀一「埋経の源流をめぐる問題」1983年初出、斎藤忠編『墳墓と経塚』吉川弘文館、1987年)、その年代観はさておき、日本の経塚にも同じく『法華経』納入の石製経箱が存在した事実は重要であろう。平壌出土の石製経箱に酷似した日本のそれは正応2

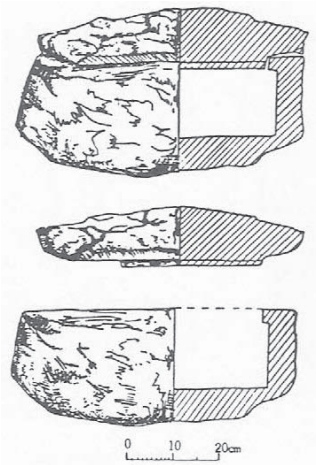


写真17　石製経箱（大城山城出土）

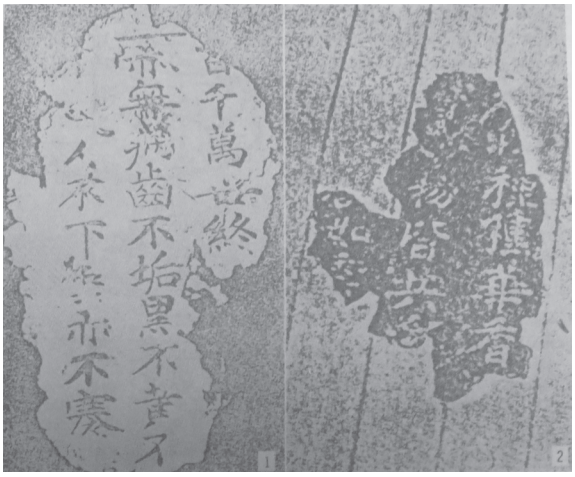


写真18　石製経箱に納入された法華経の断片

年（1289）銘の浄土寺経塚（京都）の出土品で、二部の『法華経』ほかの納入が確認される（写真19）。経塚への石製経箱（石櫃）の埋納は、早くも永久1年（1113）銘の千々賀経塚（佐賀）の事例が存在し（写真20。共に前掲『経塚遺宝』）、平壌においてもまったく同様の作善がなされたことは実に注目すべき事実であり、その実年代が是非とも知りたいところである。

写真19　京都の浄土寺経塚の石櫃（蓋径41、高36㎝）

写真20　佐賀千々賀経塚の石櫃（蓋径45、高34.5㎝）

平壌といえば高麗国の西京として、首都・開京とは直線距離で約80㎞ほどの副都に位置づけられていた。この地から日本経塚の出土品に酷似した石製経箱と『法華経』が検出され、また平壌出土とされる筒形容器の類似品が2点、伝世し、これと高麗大学校博物館所蔵の筒形容器の意匠が重なり、しかもこの館蔵品の二重蓮弁文が統一新羅期～高麗初期のものと見なされることは実に示唆深い。仮に、館蔵品の記号を種子とした場合、開城市（旧開京）郊外の高麗期の寺院、霊通寺跡から梵字を陽刻した瓦当が出現したことも併せて興味深い。それをすぐさま館蔵品の記号と結びつけることは無理だが、今後ほかの高麗期寺院跡から如何なる梵字資料が出現するかも知れず、近くて遠い開城と平壌への想いは日増しに募るばかりなのである。

なお高麗大学校博物館の調査にあたっては崔應天氏のみならず、同館の田耕旭館長はじめ館員の方々の特段のご高配に与ったことを付記しておく。

(2) 国立慶州博物館の経筒

翌9月6日、私、劉氏と石黒氏の3名はＫＴＸ慶州駅に降り立った。出迎えられたのは崔教授の愛弟子、国立慶州博物館の林宰完氏で、すぐさま同館にお連れいただいた。仲和3年（883）銘「経筒」の見学が大きな目的であったが、そのほか林氏には多くの便宜を計らっていただき、心から感謝申し上げたい。

国立中央博物館編『仏舎利荘厳』（1991年）の解説によれば、本品は皇龍寺塔に再納入されたもので、その形体から経典を納めた経筒と見られ、外面に陰刻された銘文から当初は石塔に収納され、小塔77基も共に安置されていた、という。総高19.6㎝（径4㎝前後ヵ）の小振りな作品で、112文字の銘文（うち2字不明）と11文字（うち1字不明）の年紀が陰刻されており（写真21）、同館の翻刻は次の通りである。

（句読点は私に補った）。

〈銘文〉

「夫以追攀聖迹行人、妙趣興揚霊塔明王
通範也。昔有裕神角干成出生之業、為
家国之宝敬造此大石塔。仲和三年更復
□□、時有普門寺玄余大徳。依無垢浄
光経造小塔七十七躯、写真言七十七本安処
大塔。願言表示家家有妙宝、人人得霊
珠。六道含識四生稟気、因此勝業共証菩
提。　　仲和三年癸卯二月　日修□」

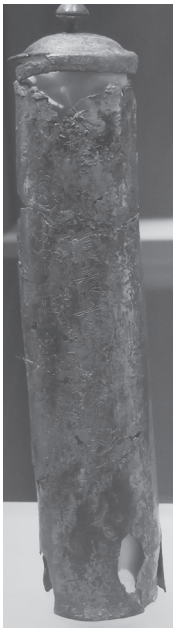


写真21　仲和3年銘舎利器（経筒）

その大意は、その昔、国家の宝として大石塔を敬造したところであったが、仲和3年（883）普門寺の玄余大徳は、『無垢浄光経』に依拠して小塔77躯を造り、真言77本を写してこの大石塔に安置した。六道すべての生類と共に、この勝れた作善による菩提の証（あかし）とならんことを、と。上記の銘文から、この舎利器は、『無垢浄光経』に基づいて書写した真言を納めた小塔77躯の内の1躯で、883年に石塔に納入された〈経筒〉であったことが知られる。

本品は、その年代と形状から日本の経筒とは程遠いものがあるが、重要なのはそのことではなく、経筒に納入された経典（本例は真言）が仏塔内に安置されたという大陸同様の事実である。実は半島における仏塔内への経典納入は、大陸に300年以上も先駆けた7世紀初めからのことで、我が国ではなぜかこのことが従来まったく問題視されてこなかった。

2、半島の仏塔信仰　―仏舎利と経典安置―

本稿の冒頭、ⓑで述べた通り、中国の仏舎利塔下、地宮への仏舎利と経典の安置は10世紀後期のことであった。確実な例証としては、太平興国2年（977）、静志寺塔（河北省定州市）の塔下へ、『宝篋印経』納入の経筒（写真22）が仏舎利容器と共に安置された（出光美術館編『地下宮殿の遺宝』

1977年、浙江省博物館編『遠塵離垢―唐宋時期の《宝篋印経》―』2014年)。だが仏舎利塔内への仏舎利および経典安置となれば、建隆2年（961）建立の虎丘・雲岩寺塔（江蘇省蘇州）の第2層から『金字法華経』7巻が（写真23)、そして第3層からは仏舎利納入の小瓶が検出され（藪田嘉一郎『経塚の起源』綜芸舎、1976年、蘇州博物館編『虎丘雲岩寺塔瑞光寺塔文物』2006年)、大陸において仏舎利を祀った仏塔への経典納入はこの頃からの供養法と見られる。

写真22　宝篋印経を納めた静志寺塔の経筒

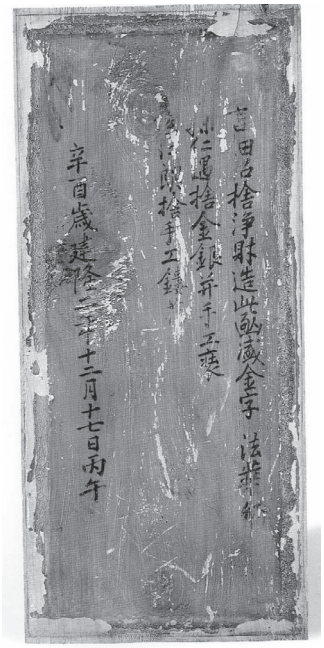


写真23　金字法華経を納めた雲岩寺塔の経箱

ところが朝鮮半島では、掲出した「半島の仏塔および納入品表」から明らかなごとく、当初（三国時代）は大陸同様、仏塔下への仏舎利だけの安置であったものが、①益山･帝釈寺木塔（600－40年）への経典納入を嚆矢として、以降の統一新羅期および高麗期に造営された数多の仏塔内に仏舎利に加えて経典も安置されることとなった（本表は、多数の仏塔例のうち、当初のそれと、統一新羅期から10世紀までの仏舎利・経典納入例のみ掲出した)。それは大陸に3世紀ほど先立つもので、納入経典も大陸が主に『宝篋印経』(『一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経』）であったものが半島では『無垢浄光経』(『無垢浄光大陀羅尼経』）が主流であり、また仏塔の構造も大陸は塼塔の形式であったのに対して統一新羅期以降の半島では石塔がメインであり、互いに相違があった。何れにしろ、半島の仏塔への経典納入が大陸に300年以上も先行した事実はあらためて注目されてよい。

半島の仏塔および納入品（仏舎利＋経典他）表　　―6～10世紀―

名　称	年　代	納　入　品			納入場所	銘　文	所在地
		経　典	仏舎利	その他			
百済昌王銘 石造舎利龕	５６７年	X	舎利龕	塑像片他	木塔址心礎	舎利龕	忠南・扶余郡 山里廃寺址
扶余・王興寺 木塔址	５７７年	X	舎利容器	青銅 円形合子他	地下心礎 舎利孔	合子	同・同郡 王興寺址木塔址

益山・弥勒寺石塔	６３９年	X	琉璃瓶他	青銅合子他	一層舎利孔	金板	全北・益山市金馬面箕陽里
慶州・皇龍寺址九層木塔址	６４６年	X	青銅円筒形舎利器他	念珠他	九層木塔心礎石方形舎利孔	刹柱本記	慶州市普黄洞

※　この他、同様の経典未納の仏塔遺構として、百済の軍守里寺址（６世紀末）、扶蘇山寺址（６－７世紀）、旧衙里寺址（同）、金剛寺址（同）、新羅の芬皇寺模塼石塔（６３４年）などが存在する。

益山・帝釈寺址①、木塔址	７世紀初め（６００－４０年）	金剛般若経（銅板）	水晶舎利瓶（６粒）他	木漆函、石函、七宝	七層木塔心礎石	観世音応験記	全北・益山郡王宮面王宮里宮坪
感恩寺址②、西三層石塔	６８２年	経典	水晶舎利瓶（１粒）	青銅殿閣形舎利器他	三層塔身舎利孔	墨書	慶北・慶州郡陽北面龍堂里
伝・皇福寺址③、三層石塔	７０６年	無垢浄光大陀羅尼経	琉璃瓶（４粒）他	如来像他	二層屋蓋石方形舎利孔	舎利外函	慶州市九黄洞
漆谷・松林寺④、五層塼塔址	８世紀、１２世紀	仏経	琉璃舎利瓶他	仏像他	二層（舎利瓶）五層塔身（仏経）		慶北・漆谷郡東明面九徳洞
仏国寺釈迦塔⑤、	７５１年	無垢浄光大陀羅尼経他	琉璃舎利瓶（４６粒）他	青銅飛天、小木塔（１２基）他	二層塔身方形舎利孔		慶州市進峴洞
益山・王宮里⑥、（官宮寺址）五層石塔	統一新羅時代（８－９世紀）	金製金剛経版	琉璃舎利壺他	金銅仏他	一層屋蓋（経、壺）心礎石（金銅仏）		全北・益山郡王宮面王宮里
奉化・西洞里⑦、東三層石塔	９世紀半ば	無垢浄光大陀羅尼経	琉璃舎利瓶（３粒）他	土塔（９９基）	一層塔身方形舎利孔		慶北・奉化郡春陽面西洞里
伝・桐華寺塔⑧、	９世紀	無垢浄光大陀羅尼経	蠟石舎利壺	蠟石小塔（５３基）	塔内		大邱市東区道鶴洞
⑨、桐華寺金堂庵西塔	９世紀	同	鍮舎利盒、銀小円筒他	青石小塔（９９基）	一層塔身方形舎利孔	塔誌（１３１９年他）	同
⑩、同東塔	８７５年、他	同	銀舎利内函他	小石塔（多数）	一層塔身方形舎利孔	塔誌	同
奉化・鷲棲寺⑪、三層石塔	８６７年	同	蠟石舎利壺		塔内	舎利壺	慶北・奉化郡物野面皆丹里
海印寺妙吉祥塔⑫、	８９５年	無垢浄光大陀羅尼経他		塑造小塔（１５７基）	塔内	塔誌	慶南・陜川郡伽倻面緇仁里
襄陽・禅林院址⑬、三層石塔	統一新羅 or １０世紀	無垢浄光大陀羅尼経		蠟石小塔（６４基）他	基壇下		江原道・襄陽郡西面黄耳里
⑭、公州・東院里三層石塔	統一新羅時代	同	舎利（６粒）他	同（８基）他	一層塔身舎利孔（舎利）基壇（小塔他）		忠南・公州郡新豊面東院里
咸陽・昇安寺址⑮、三層石塔	１０世紀	同	琉璃舎利瓶他	琉璃連珠他	一層塔身円形舎利孔	重修記（１４９４年）	慶南・咸陽郡水東面牛鳴里
光州・西五層石塔⑯、	１０世紀初	経文	銀舎利壺他	銅鏡他	二層塔身方形舎利孔		光州市西区亀洞
月精寺⑰、八角九層石塔	高麗初期（１０世紀）	全身舎利宝篋院陀羅尼経	水晶舎利瓶（１４粒）他	銀如来像他	一層塔身（経、舎利）五層蓋石（如来像）	墨書	江原道・平昌郡珍富面東山里
⑱、無量寺五層石塔	高麗時代（９３６－１３９２年）	陀羅尼経	水晶舎利瓶（灰白色９３粒、青色１粒）他	金銅如来・菩薩像他	一・三層塔身（如来・菩薩像）五層塔身（経、舎利）		忠南・扶余郡外山面万寿里

※　本表の作成にあたっては、前掲『仏舎利荘厳』所収の姜友邦「舎利荘厳の性格区分」表と「韓国仏舎利荘厳具遺物目録」表、新川登亀男編『『仏教』文明の東方移動』（汲古書院、2013年）所収の周炅美「三国時代（高句麗･百済･新羅）舎利荘厳具目録」表を参照した。

上述した仲和3年（883）銘の経筒は同年に大石塔に安置されたものだが、本表の⑪と⑫間に本品を置いたとき、『宝篋印経』の納入と併せてそこには何の違和感もあるまい。半島における仏塔は、三国（高句麗・百済・新羅）時代には木塔であったものが統一新羅期には石塔が中心となり、当初は塔下への仏舎利安置であったものが7世紀後期以降は石塔内の地上へと安置空間が移行し、併せて経典も納入されるに至った変遷が本表から知れよう。

たとえば著名な⑤仏国寺釈迦塔（751年）の場合、石塔の塔身部、その第2層内が仏舎利と経典の安置空間であった（写真24）。このほか⑥⑦⑨⑩⑮⑰の事例では、石塔の第1層内が仏舎利と経典の納入空間に、③⑯は仏国寺釈迦塔と同じく第2層内が、そして②では第3層内が、さらに⑱では第5層内が仏舎利と経典の安置空間に設定され、また④においては第2層内には仏舎利を、第5層内には経典をおのおの分納したことがそれらの石塔調査で判明している。

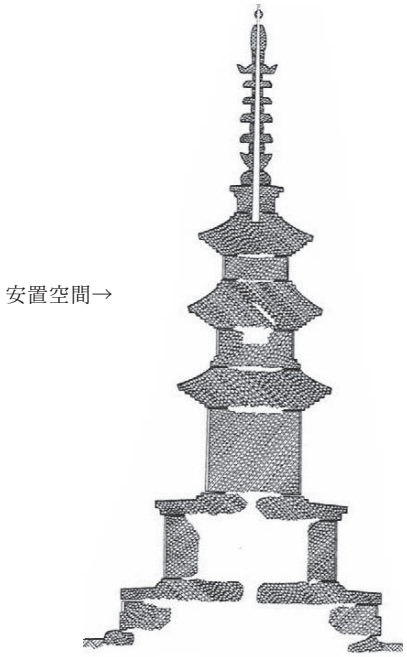


写真24　仏国寺釈迦塔と断面図（右）（第2層に仏舎利と経典が納入された）

すなわち三国時代の朝鮮半島では、中国大陸そのままに仏塔下への仏舎利納入として受容された供養法が統一新羅期ではまったく一変し、仏塔構造（大陸では塼塔であったものが、半島では木塔から石塔へ）、仏舎利の安置空間（地中から地上へ）、さらに経典供養など、その仏舎利塔の概念が大きく転換、変貌したことが確認されよう。

その際、経供養の主流となった『無垢浄光大陀羅尼経』は、仏塔の修復と陀羅尼（真言）書写による延命および極楽往生を説く密教経典の一つだが、そのなかに上述した小塔77躯と99躯の供養が併せて説かれているのである。事実、同経が納入された⑤仏国寺釈迦塔内からはその小塔（木製）が検出され（写真25）、また⑦奉化・西洞里東三層石塔では99躯の小塔が見つかり（写真26）、そのほか⑧⑨⑩⑫⑬⑭からも同経に基づくと見られる多数の小塔が発見されている。なお同経は、わが国の称徳天皇による百万塔陀羅尼の淵源としても知られるところである（勝浦令子「東アジアの『無垢浄光大陀羅尼経』受容と百万塔」速水侑編『奈良・平安仏教の展開』吉川弘文館、2006年）。

そもそも経典は、後に「法頌（ほうじゅ）舎利」や「法身（ほっしん）舎利」、いわゆる〈法舎利〉とも呼ばれ、〈仏舎利〉と

の対概念ともなった。仏滅後の当初から釈迦の遺骨を敬う仏舎利信仰の興隆後、やがて釈迦の遺教を信奉する法舎利信仰が生起し、『大般（大乗）涅槃経』（433年前漢訳）には「法身舎利」の語が登場する。これは〈仏舎利〉の存在を前提にしたものであるから、その一体性は明らかで、後の『浴仏功徳経』（710年漢訳）にも「身骨舎利（仏舎利）」と「法頌舎利（法舎利）」とが一対のものとして見えている。

大陸では仏舎利のみの安置であった未だ7世紀後期、いち早く半島では法舎利をも仏塔内に祀り、アジア仏教史上初めて釈迦の身体（仏舎利）と精神・遺経（法舎利）とを一体的に供養する新たな仏塔観、世界観を創出し得たことはまさに画期的と言えよう。これはインドや中国のそれとは発想をまったく異にする新たな釈迦神話の創造を意味し、統一新羅仏教文化の大きな成果と評価されてよい。ここに釈迦の身体と心、仏舎利と法舎利とは一つに統合、止揚され、《身心舎利》としての新たな生命が吹き込まれることとなったのである。

写真25　仏国寺釈迦塔内の小塔

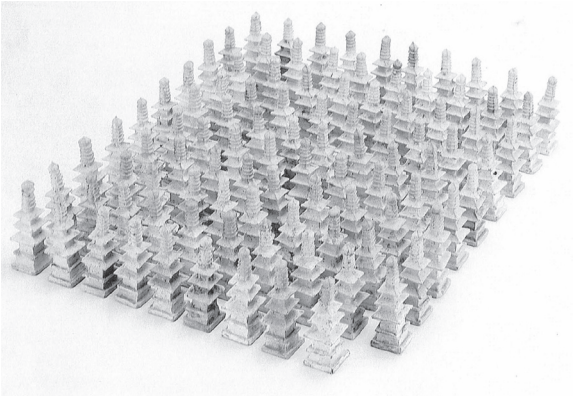


写真26　東三層石塔内の小塔（99躯）

一方、大陸の仏塔内に、初めて経典が供養されたのは10世紀半ば過ぎのことであったが、その嚆矢は建隆2年（961）建立の虎丘・雲岩寺塔で、その第2層内には『金字法華経』が、そして第3層内には仏舎利が納入され、半島に遅れること約3世紀後の作善であった。これが静志寺塔の塔下、地宮内に初めて仏舎利と経典（『宝篋印経』）が安置されたのは太平興国2年（977）のことで、同年、呉越国王の銭弘俶が王妃の孫氏と共に建立した雷峰塔（浙江省杭州市）の天宮と地宮には、仏舎利容器および経筒（『宝篋印経』納入ヵ）が安置されたことが発掘調査で判明している（浙江省文物考古研究所編『雷峰塔遺址』2005年）。

さらにこれは遼・契丹国へと波及した。重熙18年（1049）、章聖皇太后（第6代・聖宗皇帝后）が建立した慶州白塔（内モンゴル自治区赤峰市）の天宮には経筒（『宝篋印経』『法華経』ほか納入）が安置され、また塔内には釈迦涅槃像が祀られていた（九州国立博物館編『草原の王朝契丹』2011年）。これを遡る同13年（1044）、遼・第7代の興宗が改修した北塔（遼寧省朝陽市）の天宮内には経筒（『般若心経』ほか納入）が、そして地宮内には陀羅尼ほかを刻した経幢（きょうどう）が屹立し、経典安置の代替となっていた（遼寧省文物考古研究所ほか編『朝陽北塔』2007年）。

この10、11世紀、方や半島では引き続き仏舎利と経典納入の石塔が造立されているが、いまここで問うべきは半島と大陸との影響関係というよりも、まずは大きく東アジア社会における同一の供養法の展開として把握しておくべきであろう。であれば、大陸や半島と一衣帯水の間柄にあった平安期の列島においても、そうした仏教文化的な潮流に無関係であったとは到底考えられまい。

3、列島の率都婆信仰

本稿の冒頭ⓐで述べた、延暦寺僧・覚超の『修善講式』（989・991年）にはこう見える。「仏ヲ図シ経ヲ書テ卒堵婆ヲ立テ、其ノ基ニ件仏・経並（ニ）人々名帳ヲ埋納テ、霊験ノ仏地」として「毎年今日恭敬」する（関秀夫『平安時代の埋経と写経』東京堂出版、1999年に、全文が収録される）、と。冒頭の通り、これが埋経信仰の初見史料となるわけだが、そこで上掲した半島の諸事例を念頭におくとき、無視できぬ史料が他にある。

Ⅰ、『日本文徳天皇実録』嘉祥3年（850）4月乙丑（18日）条によれば、「深草陵（仁明天皇墓）窣堵婆（率都婆）に陀羅尼を蔵する所、自ら発して地に落」ちたといい、またⅡ、永延3年（989）の真救による率都婆供養の願文には、「（率都婆）十三基を造立す。額に三面有り。一面に阿弥陀仏・観音・勢至各一体を図し奉る。（中略）凡そ十三基の中、法華二十八品、諸真言等を写し奉る。」（『本朝文粋』巻13）、と見える。さらにⅢ、鎮源の『法華験記』（1040～4年成立）によれば、「昔、一の聖ありき。この西の峰の上に率都婆を立てて、法華経を籠め」（巻下・110話）たといい、これら3例から率都婆の内部あるいは外面に『法華経』や陀羅尼（真言）、そして仏図などを収蔵、あるいは書写した旨が知れる。この場合、『修善講式』のごとく率都婆の地下に仏経と仏図を埋納したわけではなかったが、同様な率都婆と経典と陀羅尼と仏図との密接な関係が読みとれよう。『修善講式』の事例に先立ち、こうした率都婆の供養法が既に存在したことは特に留意されよう。

言うまでもなく率都婆は仏舎利塔、仏塔のことだが、問題は率都婆と経典・陀羅尼との関係である。そこですぐさま思いあたるのが上述した朝鮮半島の石塔の諸事例、〈仏塔＋経典・陀羅尼＋仏舎利〉のセットで、7世紀後期の統一新羅時代から15世紀の朝鮮時代にいたるまで一貫して経典（陀羅尼）が石塔に納入されていた（上掲の一覧表では、高麗期以降は割愛した）。これに対して列島での仏塔への経典安置は天平13年（741）の国分寺七重塔が嚆矢となるが（『続日本紀』）、方や大陸において仏塔と経典と仏舎利とが結びついたのは2世紀後の961年以降のことであり、当然これは国分寺塔例のモデルとはなり得ない。『修善講式』に先行する列島の〈率都婆＋経典・真言〉の関係については、一貫して経典（陀羅尼）が安置され続けた半島の仏塔供養法の伝統についてあらためて顧慮する必要があるだろう。

なお仁明天皇墓における率都婆と陀羅尼との結合の問題については既に唐代の大陸文化にその先例が認められるため、本章の最後で触れたい。

かくて平安期の率都婆については墓標であったものと、そうではなかったものとがあったわけだが、既に仁明天皇墓例と同時代の貞観9年（867）、真言宗の安祥寺境内には仁明の皇子、文徳天皇によって「毘盧遮那五輪率都婆」（「檉木、高五尺五寸」）が造立されていたことが知れる（『安祥寺資財帳』）。この率都婆内に仏経や陀羅尼の類が籠められたかは不明だが、9世紀半ばの率都婆には墓域と墓域外に設置される2種類のタイプが並存していたことが確認されよう。10世紀末期の比叡山に造立された『修善講式』の率都婆は後者のタイプで、それが経典埋納の標識となったわけだが、経典すなわち法舎利であれば、仏舎利に擬された墳墓に設置された率都婆との距離は思いのほか近しいのかもしれない。事実、半島と大陸の仏塔では、仏舎利と法舎利の大半が同一の空間内に安置されていたことは上述から明らかで、かくて墓域と墓域外に造立された2種類の率都婆は結局、通底する。

さて『修善講式』に見える率都婆下への経典埋納という作法だが、これ以前の我が国で建立された法興寺（飛鳥寺）や法隆寺、あるいは国分寺ほかの仏塔（多重木塔）ではまったく試みられなかった

手法であり、覚超の比叡山で突如として創案された供養法とは見なし難い。そもそも法舎利として特別に尊重された経典を、何らかの根拠や史的前提なくして地中にいきなり埋納する無法を犯すとは考えられない。何れにしても『修善講式』の埋経作法をあらためて東アジア的な視点で鳥瞰するとき、そこに浮上するのは経典（陀羅尼・真言）を伴った半島や大陸の仏塔供養法であり、同講式を初見とする経塚信仰を列島単独の作善の賜物と見なす一国主義的な定説はもはや臨界点を超えていよう。

その『修善講式』から40年後、同じく覚超の『如法堂銅筒記』（1031年）によれば、「鋳筒一口を（比叡山横川の）堂裏に埋め置」き、「末世の住僧（覚超ほか）」が「此の経（慈覚大師円仁の法華経）を（経筒に）移納せしめ、土石を積みて山岳と成」したというから（『大正新脩大蔵経』図像部11）、もはや率都婆に代わって経塚のマウンド（傍線部分）が既に築造されたことになる。このことから推せば、あるいは埋経信仰導入期の標識こそが率都婆だったとも想定でき、これまで単なる一標識としてのみ捉えられてきた率都婆（列島の小仏塔）に胚胎する汎東アジア性にあらためて目を向けなければなるまい。

次に、経筒の形状面から本問題を再度見直したい。中国大陸において間違いなく経筒と言えるものは、呉越国王の銭弘俶が鋳造した銭弘俶塔（阿育王塔、八万四千塔とも）であった。顕徳3年（956）供養の『宝篋印経』納入のものが初例である。前述した彼の雷峰塔（977年）安置の経筒とは、これと同形の銭弘俶塔のことで（写真27。前掲『雷峰塔遺址』）、このほか年代を異にした多数の銭弘俶塔の存在が知られ（前掲『遠塵離垢』）、先に触れた静志寺塔の経筒（写真22）も、同タイプの銭弘俶塔であった。実は、この顕徳3年の銭弘俶塔がいち早く日本にも舶載され、比叡山僧・日延の関与があったことが『扶桑略記』応和1年（961）11月20日条などから判明する（『平安遺文』4623号、同・題跋編1617号）。

写真27　雷峰塔（地宮）の銭弘俶塔
（高・35.6㎝）

写真28　藤原道長銘経筒
（高・36.4㎝）

写真29　金山寺五層石塔の仏舎利
容器（高・15.1㎝）

大陸の経筒の請来に、覚超の先輩僧の日延が関係したわけだが、しかしその独特な形状が日本の経筒に影響を及ぼすことはまったくなく、日本作の類似品は皆無であった。つまりこの時点の延暦寺では、いまだ経塚信仰が兆していなかったことが逆証される。いまのところ日本の経筒の初見資料は寛弘4年（1007）銘の著名な藤原道長の逸品だが（写真28）、その形状が銭弘俶塔とはまったく無縁なことからもそれは窺える。

一方の半島だが、経筒資料自体がきわめて乏しいため（仲和3年銘経筒のほか、高麗大学校の館蔵品もその形状から経筒であろう）、これを経筒と類似する仏舎利容器から検証しよう。まず金山寺五層石塔（全羅北道金堤郡）と安城・長命寺（伝・京畿道安城郡）銘の仏舎利容器は円筒形の作例で（写真29、30）、その形姿は道長銘経筒を彷彿とさせる。年代も前者は979～82年、後者は997年と道長銘のそれに近接する。次に、蓋と撮みが共通する円筒形の作品に、朝熊山経塚（三重）の平治1年（1159）銘の経筒と、咸陽・昇安寺址三層石塔（慶尚南道咸陽郡）の仏舎利容器（10世紀）がある（写真31、32）。

写真30　長命寺銘の仏舎利容器（高・13.3㎝）

写真31　朝熊山経塚の経筒（高・29.6㎝）

写真32　昇安寺址三層石塔の仏舎利容器（高・10.2㎝）

これらとは異なり、塔身部が角形の作例もある。前掲した鞍馬寺経塚（京都）の八角形の経筒（12世紀）と、善山・桃季寺（慶尚北道善山郡）の六角形の仏舎利容器（9～10世紀）がそれで（写真14、33）、蓋の姿も共に傘形で共通することはあらためて注目される。この桃季寺の仏舎利容器には諸仏菩薩像が線刻されるが、同様なものに、経筒ではないが求菩提山普賢窟（福岡）出土の銅製経筥（1142年）があり、釈迦・多宝像（写真34）ほかが線刻される（以上は、前掲『仏舎利荘厳』『経塚遺宝』『経塚とその遺物』）。

念のため、大陸と列島の仏舎利容器についても確認しておこう。前者の典型例は棺形のもので、慶山寺塔（陝西省臨潼県）下に開元29年（741）に納入された作品は著名である（写真35）。方や後者の事例としては、6世紀末の法興寺（飛鳥寺）塔や8世紀初頭の法隆寺塔ほかの仏舎利容器（写真

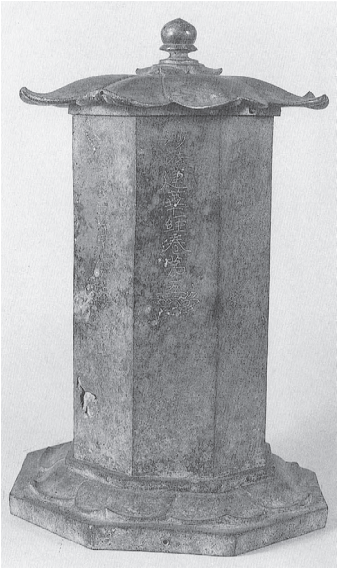


写真14　鞍馬寺経塚の経筒（再掲）（高･42㎝）

写真33　桃季寺の仏舎利容器（高・17㎝）

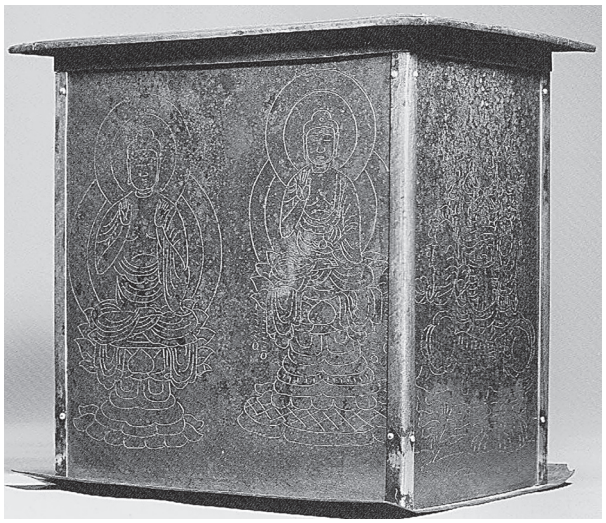
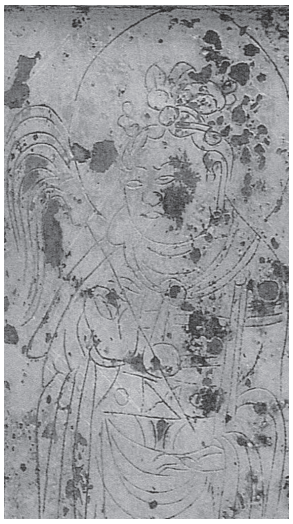


写真34　求菩提山普賢窟の銅製経筥（高・22.5㎝）



（写真33－部分）

36～39）が存在する（河田貞『仏舎利と経の荘厳』至文堂、1989年）。いかに年代差を考慮しても、これら仏舎利容器の形状と経筒の形姿とがまったく没交渉であったことは一目瞭然であろう。

専門の美術史家ではないため、これ以上の細部にわたる検証は差し控えるが、いかに日朝の作例、経筒と仏舎利容器とが似通っているか素人目にもきわめて明白であろう。すべて半島の仏舎利容器の成立年代が先行しており、両者は兄弟関係あるいは親子関係、または孫子関係といったら過言であろうか。ここから直ちに半島における埋経信仰を想定することは飛躍以外の何ものでもないが、前述した半島の仏塔供養法と列島の率都婆供養法の関連性に続き、半島の仏舎利容器の形姿と列島の法舎利容器（経筒）のそれとが紛れもなく似通った事実はもはや無視できまい。

ところで我が国の仏塔への経典納入は、天平13年（741）の国分寺七重塔内（塔裏）への『金光明最勝王経』の安置が初例だが（『続日本紀』同年2月14日・同19年11月7日条）、それも半島からの波及がなかったかあらためて考えてみる必要があろう。確かに七重塔内へのそれは半島と同様の仏

舎利共伴のものではなかったが、いまだに大陸では経典未納の渦中であり、対して半島では経典納入が開始されて半世紀以上経過し、前掲の「半島の仏塔および納入品表」では国分寺七重塔例は③④⑤間に位置づけられ、しかも塔内（塔裏）の地上安置であった。

写真35　慶山寺塔の仏舎利容器

写真36　法興寺塔の仏舎利容器

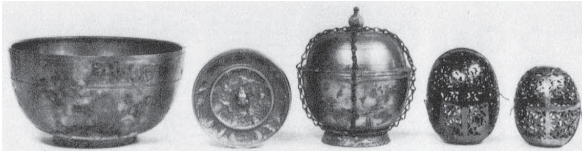


写真37、法隆寺塔の仏舎利容器

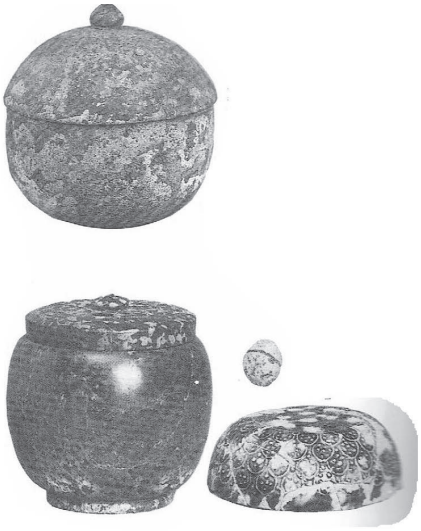


写真38、三島廃寺塔の仏舎利容器（上）縄生廃寺塔の仏舎利容器

写真39、美濃山田寺塔の仏舎利容器（上）法輪寺塔の仏舎利容器

その点で議論はかなり飛躍するかもしれぬが、たとえばこれに先立つ8世紀初頭の法隆寺五重塔（地中には前掲の仏舎利容器を埋納）のケースがある。その塔第1層内の4面には、維摩居士と文殊菩薩の法論（東）、釈迦の涅槃（北）、釈迦の荼毘と分舎利（西）、弥勒如来の浄土（南）の4テーマが塑造によって群像化される（711年造立）。これらの主題が何を典拠とした選択なのか不明とされるが（奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』第3巻、岩波書店、1969年）、これを北・西の涅槃と分舎利のシーンは〈仏舎利〉の表徴、また東・南の維摩と文殊の法論および弥勒浄土のシーンは〈法舎利〉の表徴と把握するのは大胆に過ぎようか。当該期の半島に実現した仏塔（石塔）内への仏舎利と法舎利による《身心舎利》セットの一括安置例を念頭におくとき、その五重塔の群像表現を半島の石塔供養法の翻案と見るのはあまりにも穿ち過ぎか。

すなわち半島の影響下、列島における仏塔の初発、推古天皇1年（593）の法興寺塔下への仏舎利納入以来、7世紀後期の法輪寺塔、崇福寺塔、太田廃寺塔、美濃山田寺塔、そして同期から8世紀初頭の縄生廃寺塔および同初頭の法隆寺塔にいたるまで塔下への仏舎利安置が通例であったものが（写

真36～39。岡本敏行「日本における仏舎利の奉安」鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権』勉誠出版、2010年)、突如その法隆寺五重塔の初層内には仏舎利シーンを含む法論のテーマ（法舎利のシーン）が併せて展開された背景は何か。そして続く国分寺塔内の地上に法舎利のみが突然、奉安された背景は何か。既述の通り、仏舎利を祀った仏塔と経典との結びつきは7世紀後期以降の統一新羅文化の創案であり、この前提なくして法隆寺塔や国分寺塔の発案は考え難い。当初、半島より仏舎利納入の仏塔として受容された列島のそれが、やがて8世紀の法隆寺塔では塔下の仏舎利安置と共に地上の塔内では仏舎利と法舎利を表徴、続く国分寺塔内ではさらにこれを踏まえて法舎利安置に特化、と見る模式図は不当か。あえて問題提起する次第である。

何れにしろ半島の仏塔文化移入から完全に離脱しきれていない当該期（佐川正敏「古代日本の仏塔の展開と構造的特徴」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、2016年)、はたしてそれら国分寺塔や法隆寺塔の事例が列島独自の創案とのみ評価、断言できるのかこの際よく考えてみる必要があろう。とは言え、当初の大陸における仏塔では仏舎利だけの安置であったものが（冉万里『中国古代舎利瘞埋制度研究』文物出版社、2013年)、7世紀後期以降の半島の石塔では法舎利も追加され、ついに8世紀半ばの列島の国分寺塔では法舎利のみに収斂、特化された経緯はもっと評価されていい。その点で国分寺塔例は画期的なものがあったわけだが、むろんこれが後世の埋経信仰に直結するはずもないが、発想自体はその遠祖、列島の文化的な枠組みの発現なのかもしれない。

最後に、前述した仁明天皇墓の〈率都婆＋陀羅尼＋墳墓〉の結合について是非とも触れておかねばならぬ史料がある。『日本三代実録』貞観3年（861）8月17日条には、梵本の仏頂尊勝陀羅尼を各国分寺塔や定額寺塔の心柱深くに蔵したことが見え、前述した率都婆と陀羅尼との関係を窺わせるものがあるが、実はこの仏頂尊勝陀羅尼信仰は唐代に盛行し、多くの経幢が造立されることとなった（郭麗英「仏頂尊勝陀羅尼の伝播と儀式」、清田寂天「仏頂尊勝陀羅尼に関する中国文献」『天台学報』特別号、2007年)。

実は、その功徳を説いた仏陀波利（ぶっだばり）訳（689年の経序）の『仏頂尊勝陀羅尼経』には、「若し人、能く此の陀羅尼を書写し、高幢の上に安んじ、（中略）率堵婆（率都婆）の中に安んぜん。（中略）四衢道に於いて率堵波を造り、陀羅尼を安置す。合掌して恭敬し、旋繞して行道し、帰依し礼拝」（『大正新脩大蔵経』19巻）した旨が見え、早くも初唐期における率都婆と陀羅尼との一体化が根拠づけられたことが判明する。しかもその尊勝陀羅尼の経幢は、唐代における故人や先祖追福の標識として墓所にも造立されたというから（前掲、郭、清田論考)、我が国の仁明天皇墓における陀羅尼を付した率都婆の直接のモデルということになろう。

大陸では経幢であったものが列島では率都婆として経典の記述通り受容されたわけだが、ちなみに承和6年（839）帰朝の円行『霊巌寺和尚請来法門道具等目録』や、前述した安祥寺を開山した恵運の請来品（847年帰朝）のなかに「率都波（婆）鈴一」「率都婆鈴一口」（『大正新脩大蔵経』55巻、『安祥寺資財帳』）が見出され、大陸の密教法具の意匠としても率都婆は取り入れられていた（後述する『良源遺告』にも、「仏舎利」安置の「率都婆鈴」が見える)。残念ながらその形状は不明なのだが、大陸には経幢のみならず率都婆も存在したことの傍証ともなり得よう。

以下、メモ書き的に羅列すれば、墓域における陀羅尼を付した我が国の率都婆例としては、天禄3年（972）の『良源（覚超の師）遺告（ゆいごう）』（『平安遺文』305号）や、永延2年（988）の源信『横川首楞厳院二十五三昧起請』および寛和2年（986）の慶滋保胤『起請八箇条』（『恵心僧都全集』1)、11世紀前期頃の『楞厳院二十五三昧結衆過去帳』（平林盛得『慶滋保胤と浄土思想』吉川弘文館、2001年所収）など、延暦寺に多く確認されるところである（上川通夫「尊勝陀羅尼の受容とその転

回」（2010年初出）同氏『日本中世仏教と東アジア世界』塙書、2012年）。これは王朝社会にも取り入れられ、延長8年（930）10月12日、重明親王は父・故醍醐上皇の山稜に三基の率都婆を建てたというが（『吏部王記』）、仏経などを籠めたかは不明である。そのほか『小右記』長徳3年（997）7月5日条や長保1年（999）9月28日・10月10日条ほかにも、内容不詳ながら王朝社会の葬送に関わる率都婆記事が散見している。

おわりに

従来、平安期の列島と半島の関係はといえば、9世紀のたび重なる新羅海賊襲来事件や寛仁3年（1019）の刀伊の入寇事件など、その緊張関係とも結びついた敵対的な排外意識の形成などがその政治史的な側面から強調されてきた。だが、一転これを半島に興隆した仏塔信仰の列島への波及問題としてあらためて捉え直したとき、彼我の関係はまったく新たな相貌をおびるに相違あるまい。

現段階での確認可能な史資料はおおよそ以上の通りだが、あらためて平安期の列島を囲繞した半島と大陸における仏塔信仰の一大潮流に注意を喚起しておきたい。

最後に、本韓国調査は、「岩手大学平成29年度研究人材育成支援経費」（研究代表者：劉海宇）に基づき実施したものであり、調査の機会をお作りいただいた劉海宇氏に御礼を申し上げたい。調査にあたっては、劉氏は無論のこと、石黒ひさ子氏、崔應天氏をはじめ加島勝氏（大正大学）や手島崇裕氏（韓国・慶熙大学校）にも細々としたご配慮をいただき、併せて謝意を表したい。また『考古学ジャーナル』誌に掲載された高麗大学校博物館資料をご教示いただいた伊藤博幸氏（本センター）にも御礼を申し上げる次第である。